

自転車の左側通行に対する意識分析

徳島大学 学生会員 ○長井大樹
徳島大学大学院 学生会員 小島拓郎
徳島大学大学院 正会員 山中英生

1. 研究背景

近年の日本では、自転車は買い物や通勤通学、レジャーといった様々な目的で世代を問わず多くの人々に利用されている。さらに、健康や環境にやさしい乗り物として注目され、自転車利用者の増加が見込まれている。しかし、日本の自転車走行空間は、昭和40年代のモータリゼーションによる自動車の交通事故問題により歩道通行を許可するようになり、歩道での自転車通行の習慣が続いた結果、自転車は「車両」とであるという意識の希薄化が進み、歩道を双方向通行するのが当たり前となってしまった。さらに歩道を双方向通行するのに慣れた自転車利用者の中には車道上においても通行方向を気にしない人が現れ、車道を逆走する自転車も出てくるようになっている。このような状況を改善していくために2013年12月1日から改正道路交通法にでは路側帯での自転車の逆走が禁止されるようになり、対策が進み始めている。

2. 研究目的

自転車の双方向通行の危険性と認識の実態を明らかにすることを本研究の目的とした。そのため、自転車の出会い頭事故研究の双方向通行の危険性の知見について、WEBアンケートで自転車利用者の認識を分析した。

3. 既存研究からみた双方向通行の危険性の考察

自転車の事故は70%以上が交差点で生じており、交差点以外での出会い頭、右左折事故を含めると85%以上が、自動車と自転車が交差する地点で生じている。一方、蓑島ら¹⁾は細街路から進入する自動車と幹線道路を走行中の自転車との事故を分析し、車道を逆走する自転車、歩道上の民地寄りから左方向から走行する自転車との事故発生率が高いことを明らかにしている。一方、萩田ら²⁾は、交差点における自転車事故は自動車の直進時と左折時は右側通行の自転車（逆走自転車）と多く発生しているが、右折時は左側通行の自転車と多く発生していることを明らかにしている。このように、自動車の進行方向によって、衝突の多い自転車の進行方向が変化する。大半の交差点で自転車が2方向から進行している我が国の現状からみると、自動車は2方向から歩行者の4倍以上の速度で接近する自転車を同時には注意できないことが事故の要因であることが推察できる。

4. 調査方法

表1 調査概要

全国の一般人を対象に普段走る自転車の走行位置・走行方向に関する質問と幹線道路と細街路交差点における自転車の危険な走行位置・走行方向に関する質問をWEBアンケートで実施した。（表1）

まず、普段走る自転車の走行位置・走行方向に関しては、図2に示す3種類の道路パターン（歩道のない

調査方法	セルフ型ネットリサーチ mixi survey (WEB アンケート)
サンプル数	500人 男：307人 女：193人 年齢 20代以下82人、30代～50代388人、 60代以上30人
実施期間	2014年12月30日（火）
主な質問内容	走行位置に関する質問 交差点において危険な走行位置



図2 走行位置の質問図

道路、段差のある歩道付き道路、自転車レーンの整備された道路）を提示して、回答者が下から上に自転車で走行する際、4つの走行位置を利用する比率を数値で答えさせた。次に、幹線道路と細街路交差点における自転車の危険な走行位置・走行方向に関しては、図3に示す幹線道路と細街路の交差点で乗用車が細街路から幹線道路に侵入してくる場合、幹線道路を走行する自転車①～⑥で最も危険な走行位置と2番目に危険な走行位置を選択させた。

5. 走行意識の分析結果

図4は普段の走行位置の割合の平均である。右側に比べて、左側を走行するという傾向が見られる。自転車レーンが整備されている道路では他と比べて左側歩道の比率が低く、自転車レーンの率が高い。一方で、自転車の逆走となる右側走行割合は、歩道のない道路と、歩道付道路では車道を走る割合が小さいが、自転車レーンの整備された道路では自転車レーンの右側走行が多くなっている。このことより自転車レーンがあることで車道を逆走する自転車を誘発させている可能性が考えられる。

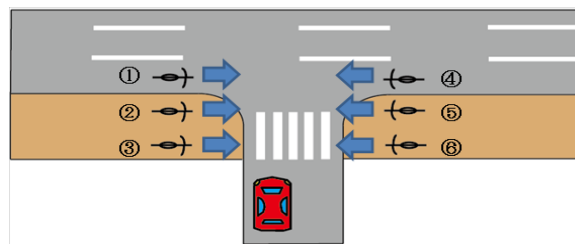


図3 危険な走行位置

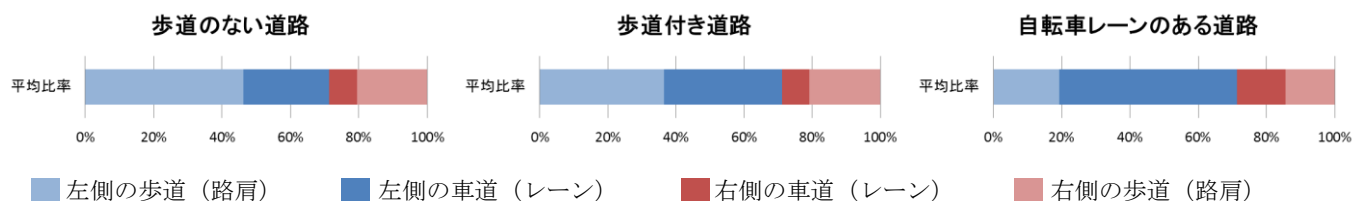


図4 走行位置の平均比率

6. 危険な走行位置の認識

蓑島らの結果より得られている事故率を高い順位に対して、回答された順位との差を正解度として集計した結果が図5である。事故率が高い1位と2位について、どちらも1, 2位以内に回答できた人（正解度0, 1点）の割合は8%と低く、逆走が危険な走行位置であることは認識できていない可能性がある。

図6は逆走が危険な走行位置と認識している割合（正解度1以下）を性別、年齢、利用頻度別に示している。性別では、女性の方が、年齢では若年と高齢者が認識割合が低く、利用頻度では、自転車乗らない人ほど低い。

このように、自転車が左側通行というのは教えられているが、車道を右側通行する危険性は認識していないということが考えられる。

参考文献 1)蓑島治, 金子正洋, 本田肇: 自転車事故の分析による交差点設計上の留意点の整理, 日本道路会議論文集第28巻,2010 2)萩田賢司, 森健二, 横関俊也, 矢野伸裕, 牧下寛: 通行方向に着目した自転車事故の分析, 土木計画学研究・論文集, No.30,2013

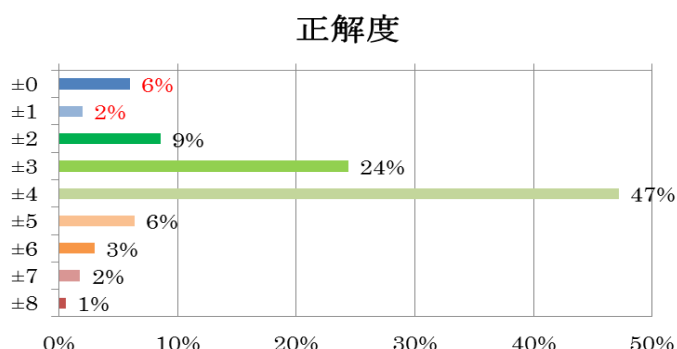


図5 危険な走行位置の認知度

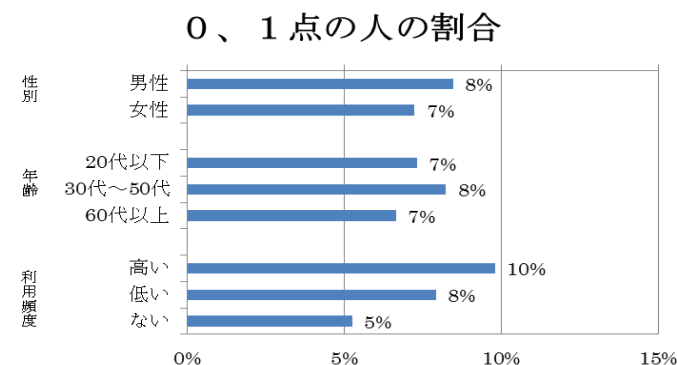


図6 危険な走行位置認知者の割合